

Lost times

涼音 紗都

序章

十月のよく晴れた日のこと。

その朝突然家の目の前の国道で、大型トラックが女子中学生をはねるという交通事故が発生した。それだけでも十分大事のこの事故は、私にとって生涯最大の事件だった。

というのも、トラックにはねられた張本人——つまり事故の被害者が、私だったからだ。なんだ、たいした事故じゃないだろう、と笑わないでほしい。実際私はその事故で死亡しているのだから。

・・・念のためにもう一度言っておくね。私は、その事故でトラックにはねられて死亡した。冗談ではない。現に今、私の家では私の葬式が行われている。自分の葬式に参列するというのも変な話だが、私は部屋の窓から自分の葬式を見ている。

要するに私は、幽霊になってしまったのだろう。

「あの一。試験を開始してもよろしいでしょうか？」

ふいに、斜め後ろから声がした。すれ違った人はみんな私を無視して（見えないんだから当たり前か）通り過ぎていくのに、声をかけてくるなんて。・・・こいつ、幽霊？

「ご挨拶が遅れました！私は天使のシタッパです！」

「シタッパって・・・名前？」

「そうです！」

なんだか無邪気な感じもするが、『名は体をあらわす』。みるからに『下っ端』だ。たとえるなら、試験明けの大学生。なんとなくぼーっとしてる。一応天使っぽい白い服は着てるんだけどね。

彼はそそくさとメモ帳を取り出すと、突然しゃべり始めた。

「では、第1問いきます。1問目と2問目は簡単です。正答率80パーセントですから。・・・

『イイクニ作ろう』といえば何幕府？」

いきなり始まった試験とやは、あまりにもばかばかしい内容だった。

「鎌倉幕府」

シタッパはメモ帳をめくる。

「正解です。では、第2問！ペリーは、どこにやってきた？」

「・・・浦賀」

歴史の教科書にばっちり載っている。

「では第三問。この問題の正答率は15パーセントです」

いきなり難しくなったが、そもそも何の試験かも分からないためどうしようもない。

「あなたの心残りは何ですか？」

急に飛躍した話に戸惑っている私をよそに、シタッパはカウントダウンを始めた。おい

おい・・・。

「54、53、52・・・」

一分で答えが見つかる問題じゃないでしょ！

「3、2、1、0・・・あー、ご愁傷様。一週間頑張ってください」

え？一週間って何を・・・？

次の瞬間、目の前が真っ白になった。

気付くと私は、家の前の道路に立っていた。すぐ横を大きなトラックが通り過ぎていく。

「シタツパ、いる？」

小声で言ってみる。声だけで返事が返ってきた。

「居ますけど、どうします？今使っちゃいますか」

「何？秘密道具みたいなものがあるの？」

まあ、期待はしていないけど。

「えっとですね・・・今選べるのは一つです。――『諦めて地獄に行く』」

彼が取り出したのは小さなチケットのようなものだった。

「・・・いい。やめとく。地獄に行く予定はないし！」

ただ、今私はどんな状況にいるのか、それだけ教えてくれたらいいんだけど・・・。

「あなたが死ぬはずだった瞬間、の1分32秒後です」

つまり、私がこれから過ごす一週間は、私にとって存在しないはずの時間という事になる。

「一週間後、課題をクリアしていなかったらどうなるの？」

「それはですね・・・」

シタツパは言葉を切る。そして、静かに告げた。

「――もう一度死にます。それで、今度こそ地獄行きです」

予想はしていたが、ここまであっさり言われると悲しくなってくる。

「・・・絶対、地獄になんか行かない！」

生きてる時には出したことのないほどのやる気が漲ってくる。

「死ぬつもりもなかったけど、地獄に行くつもりもないから！」

私は、学校に向かって駆け出した。いつの間にかそこにあった、鞆を掴んで。

目を覚ますと、一面の白い空間。さっきと変わらない呑気なシタツパ君の声。

「久しぶりだなー、2問正解の人」

その成績は何に影響するの・・・？

「全問不正解、1問正解は地獄行きで、全問正解は天国行きなんですけどね。2問正解って微妙でしょ？一週間研修期間がもらえることになったんです」

微妙とかそういう問題じゃないか？・・・私はそんなの要らない。むしろこうなったら早く成仏したいんだけどなー。

「一週間で答えを見つけられない場合、もしくは、途中リタイアの場合は地獄行きなんですけど」

はい。そりゃあやります、もちろん。

「天国ってそんなに狭き門なんだ・・・」

「そりゃそうでしょう。人間って言う生き物は、環境は壊す、動物は絶滅に追いやる、あげくの果てには人間同士で殺しあってるようなバカ野郎なんですから」

事実だけどひどい言い草だ。

「それだけ悪事を働いててあっさり天国に行こうとか虫が良すぎませんか？」

悪魔のような微笑を浮かべている天使が言ってるのは、正論。悔しいが、ぐうの音も出ない。

「納得した。――私は研修期間とやらに何をすればいいの？」

とたんにシタツパはニンマリする。

「ようやく乗ってきましたか～。・・・簡単に言えば、『探し物』ですね」

何を探すのだろうか。・・・なんか嫌な予感がする。

「それを探すんですよ」

「それじゃ探しようがないでしょ！ 探すものくらい教えてよ！」

そして・・・彼は大きくため息をついた。

「しょうがないなあ。――じゃあこれだけ、教えておきます」

今まで気付かなかったけど、シタツパの後ろには大きな扉。それがゆっくりと開いていく。

「探したかったものを、探しなさい。それが一番の近道！」

だから・・・ちゃんとしたヒントを出さんかあ～！！

結局そのまま、私の意識はフェードアウト・・・。

第二章

事故にあったのが登校途中だったため、学校にはいつものように登校した—ように、先生やクラスメイトにはみえているのだろう。

「起立。姿勢—礼」

委員長の号令で始業の挨拶をする。一時限目は英語だった。

「What does she want?」

「She wants...」

彼女のほしいものは何か、か。私のことを言っているみたいだ。

あの時事故に遭わなければ、この授業も普通に受けていられたはずだ。あの時、車に気をつけていれば・・・？

その瞬間、私はあることに気がついた。私は、事故の瞬間を覚えていないのだ。

「あの時・・・何が起こったんだろう」

私が車道に飛び出したのか、それともトラックが突っ込んできたのか。

「『探したいもの』—」

私の場合、それは、『自分が死んだ理由』なのかも知れない。

「地獄に行くつもりはないから・・・」

この決断は間違っているかもしれない。でも、まだ一週間残っている。

私は、これが『探し物』である可能性に、賭けてみることにした。

華麗なスタートダッシュを決めた一かに思えた私のチャレンジは、その日のうちに行き詰まることになった。なぜかという、今私が存在しているという事は、あの事故はなかったという事であり、つまるところ調べる事故そのものがなかった事になっている、という非常に複雑な状況。

無い袖は振れない。

存在しない（ことにされている）事故は、調べられない。

そんなことにも気付かず、一時限目から四時限目までを、事故について必死に考えながら過ごした私は、一体何なのだろう……。そう思いながら、給食の準備に取り掛かる。こんな時も、中学生というのは日常の作業をこなさなければいけない。

「ついてないなー」

私は、一人呟いた。

思えば、給食を食べる時私はいつも一人だった。グループを作る時の私の定位置は、窓際の一番後ろ。

「私って、友達いなかったのかな」

死んでみて、初めて気付いた。一いや、本当はとっくに気付いていたのかもしれない。気付かないふりをしていた、というべきか。

そのため、交友関係から『探したいもの』を割り出すという選択肢は、おそらく不可能だと思われた。

結局ふりだしに戻り、どうしようもなくなった私は、昼休みにシタッパを呼び出した。場所は、人目に付かない体育館裏だ。

「シタッパ・・・ヒント、もうないの？」

大きな、わざとらしいため息。

「まったく、ちゃんと考えたら分かりそうなものですけどね～」

一日目にしてすでに心が折れそう——というか、今折れた。 こんな下っ端野郎にまで馬鹿にされては、仮に天国にいったとしても、浮かばれるわけがない。

「もうやだ・・・」

こうなったら、強硬手段に出るしか・・・。私は彼の背後に回ると、

「早く・・・言いなさい」

ヘッドロックをかけた。

「ギブ、ギブ！ 分かりましたよ・・・」

私の勝ちだ。（完全なる不意打ちだから、文句言われてもしょうがないけどね）

「モノじゃないですよ、あなたの場合」

・・・え？

「やり残したこと・・・といったらいいのかな？おそらく、自分でも気付いていなかったことだと思います」

言ってる意味が分からない・・・。何のこと？

「要するに、あなたの心残りというかなんというか、そういうものです」

心残りか。それだったら数え切れないほどある。

「お腹いっぱいになるまで焼肉を食べてみたかった。海外旅行がしたかった。一回でいいから、誰か本物の芸能人に会ってみたかった・・・」

「そういうことじゃなくてですね・・・」

じゃあ、なに？

「いやぁ・・・これ以上は、ちょっと」

私にヘッドロックをかけられた後頭部をさすりながら、彼は去って行った。

結局、ヒントというほどのものは得られなかった。

「心残り、か・・・」

私は考えてみる。――そして、ふと思い当たった。

「友達・・・？」

私は、友達なんていないと思っていた。でも・・・

「『自分でも気付いてない』ってことは」

実は、私は寂しかったのかもしれない。

私は探してみることにした。

これから出会えたかもしれない、『友達』という存在を。

目を覚ますと、一面の白い空間。さっきと変わらない呑気なシタツパ君の声。

「久しぶりだなー、2問正解の人」

その成績は何に影響するの・・・？

「全問不正解、1問正解は地獄行きで、全問正解は天国行きなんですけどね。2問正解って微妙でしょ？一週間研修期間がもらえることになったんです」

微妙とかそういう問題じゃないか？・・・私はそんなの要らない。むしろこうなったら早く成仏したいんだけどなー。

「一週間で答えを見つけられない場合、もしくは、途中リタイアの場合は地獄行きなんですけど」

はい。そりゃあやります、もちろん。

「天国ってそんなに狭き門なんだ・・・」

「そりゃそうでしょう。人間って言う生き物は、環境は壊す、動物は絶滅に追いやる、あげくの果てには人間同士で殺しあってるようなバカ野郎なんですから」

事実だけどひどい言い草だ。

「それだけ悪事を働いててあっさり天国に行こうとか虫が良すぎませんか？」

悪魔のような微笑を浮かべている天使が言ってるのは、正論。悔しいが、ぐうの音も出ない。

「納得した。――私は研修期間とやらに何をすればいいの？」

とたんにシタツパはニンマリする。

「ようやく乗ってきましたか～。・・・簡単に言えば、『探し物』ですね」

何を探すのだろうか。・・・なんか嫌な予感がする。

「それを探すんですよ」

「それじゃ探しようがないでしょ！ 探すものくらい教えてよ！」

そして・・・彼は大きくため息をついた。

「しょうがないなあ。――じゃあこれだけ、教えておきます」

今まで気付かなかったけど、シタツパの後ろには大きな扉。それがゆっくりと開いていく。

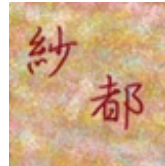
「探したかったものを、探しなさい。それが一番の近道！」

だから・・・ちゃんとしたヒントを出さんかあ～！！

結局そのまま、私の意識はフェードアウト・・・。

Lost times

<http://p.booklog.jp/book/36587>



著者：涼音 紗都

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yoshimune819moe/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36587>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36587>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.